

巻頭言

「当事者」支援を超えて

大高 研道(聖学院大学教授、協同総理事)

北アイルランド留学時代

イギリス北アイルランド留学時代、片道1ポンドなどという価格破壊も甚だしい航空券(但し、20ポンド強の税金は別)をみつけては、年に数回ロンドンに遊びに行った。観光というよりは、目当てはもっぱら中華街界隈の日本食を含むアジア系レストランでの食事や食材の買い出しである。当時はすでに一般のスーパーマーケットでも醤油や豆腐、インスタント麺などは購入できるようになり、以前と比べて食事情はずいぶん向上したようだった。しかし、私を含めてたった2人の日本人しか住んでいない町に日本食文化が根づいているはずもなく、食に関しては保守的な人間が生きていくのは容易なことではなかった。いきおい日本から遊びに来た姉や友人は、到着したその日から日本食レストランにつき合わされる羽目になった。その頃の心持が埋め込まれているのか、いまでも仕事でロンドンに行ったときは、自然と日本・アジア関連のマーケットやレストランに足が向いてしまう。

もうひとつロンドンに行く目的があった。それは、邦文の本や雑誌を入手することである。ピカデリー・サーカス駅を北に

向かい、リージェント・ストリートから入ったブリューワー・ストリート (Brewer St.) は日本関連の店が多い通りで、その一角には古本屋もあり、日本で購入する新品と同じくらいの値段で古本を買うことができた(ロンドンで新品を購入しようと思ったら定価の2~3倍の値段だった)。ひょっとしたら当時の孤独感や将来への不安の表れか、書架には島崎藤村、遠藤周作や三浦綾子など、なんとなく人生を考えさせるような筆者やタイトルの作品が多かったような記憶が残っている。灰谷健次郎の小説もそこで見つけた。

子どもには「タカラモノ」がねむっている

小学時代に観た映画「兎の眼」の強烈な印象とともに灰谷健次郎の名前は覚えていたが、その作品をまともに読んだことはなかった。読み始めると、半ば「暴力的」とさえ思えるような心の中にぐいぐいと入り込んでくる筆力にいつの間にか引き込まれていった。

灰谷の作品には、たくさんの「タカラモノ」をねむらせている子どもたちの姿が生き生きと描かれている。そして、それらの

子どもたちは無限の可能性を秘めているだけでなく、大人たちが失ってしまった多くのことをも教えてくれる存在である。灰谷は言う。「優しさというものは情緒の世界にあるものではなく、自らを変え、他人をも変える力として存在しているものだということを教えてくれたのは子どもたちであった」(『わたしの出会った子どもたち』新潮社、1981年、95頁)と。

「弱い人」を受け入れることによって生まれる優しさ

もうひとつの特徴は、障がい児や生活困窮者など、その物語の中に必ず「弱い人」が登場してくるという点だ。偏見や差別が渦巻く社会において、「弱い人」はお荷物とみなされがちである。しかし、「弱い人」の存在はつながりを生み出し、社会を優しくする。こうして、灰谷はどんな人間の存在にも意味があることを力強くうたえる。人がつながり、優しさを生み出す重要な媒介的役割としての当事者の姿をクローズアップすることによって、その存在の意義が示されるといってもよい。

「同じ人間だという実感」のベースにあるもの

社会的困難に直面している人びと(「当事者」)の視点から社会をみつめることによって、それまで見えていなかったものが見えてくる。異質者を排除する「閉じられた世

界」ではなく、多様性を許容する「開かれた世界」であることはとても大事なことだ。灰谷は、それを子どもと先生、障がいを抱える人々と健常者との関係を等質的に描くことによって優れた世界観を提示した。

その一方で、子どもたちの側からその世界を覗こうとしたとき、なぜか私にはあまり彼ら彼女らの声や姿が浮かんでこなかった。はじめは障がい者といった「弱い人」も同じ人間だという意識が、結局は強者の庇護の論理で語られているからだと思っていた。子どもや困難を抱えた人びとが対象化されているためか、その等質性が示されるのは大人(教師・支援者)からであり、子どもと大人、教師と生徒、支援者と非支援者の立ち位置は完全に分けられている。

しかし、最近は、もっと根本的な違いがあるのではないかと考えるようになった。それは、「誰もが成長できる」、「だれもがタカラモノを持っている」という人間観を超えた関係性へのまなざしにかかわる。すなわち、個々の生き方を尊重し引き上げてあげるといふ協同・共生観ではなく、誰もが同じように弱さを抱えているという気づきと共有こそが、「同じ人間だという実感」のベースにあるべきだという思いである。

共に生きる実感と「弱さ」の共有

可能性を信じて支援していくことは大切である。しかし、自分は支援される存在だという気持ちを超えるものがなければ、支援によって助けられる多くの人びとは元気

にはなれない。大切なのは、「弱さを抱えているのは自分だけではない」という気づきであり、さらにはその思いが実感として、支援される側だけでなく、支援する側の内にも生まれることが決定的に重要である。

誰もが支援し支援されるという互酬的な関係や存在自体に意味を見いだすような説明を超えて、私たちが弱さを抱えた仲間として同じ地平で語りあえたときに初めて「共に生きるという実感」はわがものになる。

「当事者」支援を超えて

本号の特集でも紹介されているように、近年、労協では生きづらさを抱えた若者や障がい者の社会的・経済的支援に関わるさまざまな事業に取り組んでいる。困難を抱えた人びとの就労のみならず、共に仕事をおこす実践も見られるようになった。そのような現場では、さまざまな矛盾や葛藤に直面しながらも、少しずつ協同労働の実質化・実体化にむかって進んでいる。生きづらさを抱えてきた若者を受け入れたある清掃現場では、ベテランの組合員が「変わったのはむしろ自分たちだ」と語っていた。それまであまり関わりのなかった異質者との触れ合いを通してまわりの人びとも変化していくプロセスからは、個の成長とコミュニティ（働く現場）の変化成長が不可分

であることを教えられたような気がしている。私は、そこに共時的な成長と学びあいのプロセスが埋め込まれている協同労働のひとつの到達点をみた。

そして、これらの実践の次なる課題として私が考えているのが、支援者・非支援者の垣根を越えて共に働く仲間としての関係性を、如何にして実質化するかという点である。そのひとつの鍵となるのが関係性の柔軟化である。それは、たとえ状況によって多様な役割の違いが生じたとしても、支援の対象（ないし問題の発生源）としての「当事者」を固定化させないということであり、逆説的にいえば、だれもが当事者になるということを意味している。

そのためにも「弱い人」を強くする支援ではなく、「強い」立場にあるものとして固定化されがちな人びとを含めて、だれもが安心して弱さをさらけ出せるような空間の創造が肝要となる。主体に即してみれば、「助けてあげる人」ではなく、「助けられ上手」をたくさん作ることと言えるかもしれない。

だれもが社会に生きる当事者として「協同で主体化」するプロセスを基盤とした協同労働の実質化が、弱さをさらけ出すことがむしろ良いのだという社会の創造の突破口になるのではないかと、密かに想見している。